８月総評

西躰　かずよし

その海を前にとむらう
きみたちのために
わたしも罪人になる

雲理そら　　大阪府

少なくとも死者を弔うためには、生きている必要がある。だから、死んでしまった者とは一緒に死ねない。それでも弔う者と、同じところに立とうとするなら、生き残ってしまったという罪を甘受するほかない。弔いを自身のものとすること。それは、罪人になることで、はじめて可能になるに違いない。

向日葵の折れる形に祈る人

田崎森太　　東京都

「向日葵の折れる形」で思い出すのが、首を吊ったように花が真下を向いている様子である。葉っぱの何枚かが枯れて、大きな花が咲ききって真下を向いている様子は、不気味であった。
この作品で注目するのは、そうした折れる形と、祈りを重ね合わせている点である。祈りに内在する暴力性や、憤りのようなものを見事にとらえている。

釉薬の白の冷たさ花曇

福山ろか　　埼玉県

釉薬の白を冷たいと表現することは、よくあることのように思う。けれどもその器

に、花曇を組み合わせることで風景は一変する。曇天を背景にした真っ白な陶器。そこには張り詰めた静寂がある。ただ「釉薬の白の冷たさ」という記述を考えれば、この情景は、書き手の心象を詠ったものと言えるかもしれない。

ひかりはそれだけで、
旅をするというから
わたしは私を産むようにして

こはくいろ　　大阪府

「私」の証明は、「私」だけではできない。だから「私」という存在は、他人との関係性の中でしか形成されない。こんなことを書くのは、「わたしは私を産むようにして」という願いが、現実には、どれほど困難なことであるか伝えたかったから。
ただ、だからこそ、その願いが切なくも切実なものであることを読者に伝えることができるのだと思う。どうか、私が私自身でありますようにと、それは語り手にとって、唯一のささやかな願いのようにも思える。

病棟の中庭ひかりあう五月

玻璃　　愛媛県

「ひかりあう五月」という一節に魅了される。その美しい情景は、本来ならば暗い印象になるであろう「病棟の中庭」を、平穏や、快方への希望を表す場所へと変貌させる。語り手は、病室の窓から外を眺めているのだろうか。そこには、おだやかな時間が流れている。

種からあかく崩れてゆくすいか

うたた　　岡山県

スイカの種は黒い。だから「種からあかく崩れてゆく」という、色についての表現は、実際とは逆のような気がする。また、果肉ではなく固い種のほうから崩れていくというのも時系列としては逆さまである。そうした描写を、単なることば遊びと言ってしまうには、あまりに具体的で、これらの露骨な逆説は、滑稽でもあり残酷でもある。

この作品に込められるのは、そう遠くない先の未来についての不安で、言い換えれば、変わっていくことへの不安と言っていいのかもしれない。

酷暑日を切り分けていく心地して
これは涼しいほうの赤色

折原　　神奈川県

語り手は、酷暑日には色が付いていて、そのなかの赤い色にも、涼しいほうがあると言う。そうした発想自体、とても斬新ですてきだと思う。日々の中の、こうした発見が、生きていることを豊かなものにする。

合唱に　気をとられる
別室登校

あひる　　神奈川県

別室登校というのは、教室でなく別の部屋で学習したり、給食を食べたりする授業形態を指すものらしい。それは、授業に出るのは難しいけれど、学校へは行ける子どもたちの学習機会の確保と、段階的な教室復帰を目指すものと言えるかもしれない。

でも、そうした解釈は、何か大切なことを見落としているような気がする。他の生徒たちの授業を受けている様子に気をとられてしまうということ。孤独の内からとおく授業を見ること。見落とされているのは、「合唱に　気をとられる」という視点そのものと言っていいのかもしれない。

文庫本を書架へ戻して月鈴子

齊藤　栞　　埼玉県

文庫を書架に戻す。そのときに聴こえる鈴虫（月鈴子）の鳴き声。そこで立ち止まる語り手に共感する。やわらかな動作のあとに生じる間（ま）のようなもの。月鈴子という季語が美しい。

返信は来ない　夜がはじまる

麦野葵　　大阪府

その返信は、どうしても受け取る必要があるものだったに違いない。もし、そうであるなら、そのあとにはじまる夜は、語り手に、終わりのない長い夜を予感させるものであるに違いない。そして語り手は、それがいつまで続くのかという問いを、夜とともに抱き続けるのだろう。